

槐

かい

岡井省二創刊

平成23年5月号



寝釈迦

高橋将夫

剪定にかける時間も大石忌
春泥の足で浄土の門くぐる
風車回るこの世の美しき
春筍として禅定にあるごとし

ペシミスト入るを許さぬ春野かな
山椒の芽は山姥の恋心
恋の道学ぶことなく卒業す
老いらくの夢に昔の大試験
決着は臍の中でつくものよ
春塵の中にきらりと光るもの
結印を解いて寝釈迦となりけり

槐安集

水野恒彦

梟を肩に乗せたる少年期
縄とびを廻せば乾く山河かな
今といふ過去を生きをりかひやくら蜃楼
聖痕なき指もて花種蒔く
山響みたりしまた落つ椿かな

延広禎一

蓋あけてレシピ聴きをる栄螺かな
達磨達磨の書落しふぐり落し蛸薬師
反吐吐の出る程の氣迫ぞ貧冴ゆる
姫虻のぶめきし夕バマガマ満つ
萬葉の春初恋を思ふべし



加藤みき

雨粒に椿のいろの移りたる
天地の花見の一人なりしなり
春寒料峭箱の中から美しき箱
石段の拉げてゐたり風光る
ゆるびたる掌ふたつ鳥曇

石脇みはる

風の道鰈吊せし寒施行
早春の埠頭にをれば誰か来る
はらからとワルツを踊り卒業す
春の海口ゼワインにて乾杯す
空酒樽のそこいら土筆あまたあり

中島陽華

ゴンドラは陸の上なり猫柳
喫茶去の一期一会や櫻人
春宵の一錢五厘の葉書かな
春風やりビングルームの三輪車
高野にて愛の讃歌を山笑ふ

竹内悦子

春障子に影を落して逝きにけり
春宵の柩の上の絵心経
茎立や赤き太陽のぼりける
一人だけの瓶湯^{かぶ}せまくて亀鳴けり
水門や満満とゐる春の鴨

栗栖恵通子

大口のおかめ吐き出す追儼鬼
歌垣の春野の芝を払ひをり
春月を枕に遠野物語
朝月や逆の峰より入りにける
山笑ふそびら暴悪大笑面

大島翠木

ばた雪へしづしづ変はるノクターン
手短に閑話休題春月昇る
恋猫のもつれて消ゆるお斎かな
孟宗のいみじき粉や春曙
万愚節鯉の荒ぶをかへりみて

雨村敏子

悼 富松寛子さん

ふいに聞く知らせなごりの雪を踏む
余生なほ花の盛りを逝きにけり
紅一本悼 松本桂子さんしのばせてゆく花車
筆擱くや前もうしろも雪しづる
芳恩の一言ありし桃の花

本多俊子

桜隠しに息ととのへて語りけり
春雪や椰一木を神とせり
如月や光太郎旧居の楨大樹
御影供や海原の影大いなる
揚ひばり無音の湖に響きけり

小形さとる

鉤くづ出雲の春と覚へたり
断崖きりぎしの春の遊びとなりにけり
春ざれや頭上に例の大鴉
カッターナイフ沸々と春兆しをり
四温光柴又の空かと思ふ

久津見風牛

玉葱の芽がのびいのちあたたか
雪大佛雀一家を肚はらに抱き
雪野行くあたり真つ赤ほむらに炎立つ
人の世に代る日もある雁の空
いい加減したたかもぐら打ちにけり

近藤きくえ

手を添へてやさしき言葉下萌ゆる
春浅く煙雨に濡るる樹林かな
五色豆買うて大路の春しぐれ
春駒の嘶き房の朱きこと
うち晴れてしだれ紅梅玉雫

近藤喜子

銀色の花片となりぬ薄氷
氷解くるこの青き空ありがたう
天上の高くなりたる焼野かな
紅梅や風の圭角とれてきし
春水の光ころがり易きかな

谷村幸子

妙見の金縷梅にあうめでたさよ
籠かごもて門柱の雪はらひたり
赤卵ゆであがりたり外は雪
春浅し色とりどりの新刊書
蚯蚓ゐる土をよしとし畝つくる

瀬川公馨

春雪の秘色を放ち夜に入る
南の人に呼ばるる緋蕪かな
雪隠の鬼が逃げたぞ追儼の日
あららまあまあ藁ゆる藁ゆる
大鷲のピッチに立ちてゐたりけり

久保東海司

朝な冷え込みて鴨の輪解け切れず
温泉^ゆ煙りの梅を離れず夜となりぬ
笥より温泉^ゆのほとばしり梅震ふ
虫柱風ひるむとき梅林へ
給食の釜傾ぎ干す春休み



槐市集

鈴木勢津子

この天地以て春日遅々として
曇天に 瞼重たき 春炬燵
前山に 木喰^{もくじ} 仏^ぶ 在^きす 春の鳥
蒼穹の梅にめじろの来て遊ぶ
梅二月地は裂け煙りたなびけり

十川たかし

馬の眼に沈んでゐたる春の空
山焼いて星のふえたる静寂かな
よいとまけバレンタインの日を籠る
鳥帰るごとくに視力検査表
倒れないドミノ建国記念の日

谷岡尚美

ほこほこの土に落ちたる椿かな
カシミアの春コートなり駱駝色
室の花艶なる色を眩める
春の街サハラ砂漠の写真展
きらきら星変奏曲や春立てる

寺田すず江

あしたへの扉を開く涅槃西風
草萌にひかりと風の彩なせり
さまざまに芽吹きし山のむらさきに
鶯宿梅寡黙に咲いてゐたりけり
この道を行くほかはなし蟻歩む



槐集

高橋将夫選

鬼が来て紅引いてゐる節分会
枚方 熊川 暁子

うす紙の嵩に雛を出だしけり
冴返る子供の居ない子供部屋
開帳や人恋しさは仏にも

三面鏡うしろの春をななめにす
春霞に詩をひそませり竹生島
喜屋川 山根 征子

顔見ればもう赦してる露の臺
冬帽子昨日は海を見てきたり
マフラーの黒地一面されかうべ
天のあり受くる地のあり春の雪
着るものは素なる人なり龍の玉
高松 十川たかし

風花の地に着くきはの速さかな
切干の乾くよるひる母の郷
末黒野やはなればなれの水光る
見るからにうぐひす餅でありにけり

盃と唇ほどの間に春
守口 柳川 晋

ジパングは黄金の島青き踏む
千年の墓穴を出て摩天楼
亀鳴くや弥勒の御世のその中に
土筆摘み地球に歳を訊ねをり
春愁やをんなは泣きしあと笑ふ
安城 近藤 公子

放ちたる風船シルクロードへと
いとゆふや十年先の揺らぎをる
風立ちて胸の扉の開くる春
吾をのせて春水流るヴァイオリン
白道に紛れ込みたり雪明り
枚方 中野 京子

日当りてわれにかへりし斑雪
もう一度白紙にもどし春の雪
日本晴喜怒哀楽をたがやして
能面は見送るばかり月日貝

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」照照

うす紙の嵩に雛を出だしけり 熊川 暁子

雛人形はやらかな紙にくるんで、大切にしまわれる。従がって、箱から雛人形を出すと掲句のようなありさまになるわけである。雛人形よりも紙の方が嵩張って、あたりにちらかつている様子がほほえましい。

〈鬼が来て紅引いてゐる節分会〉の句では、女性が鬼の役を
しているであろうが、本物の鬼が来て紅を引いているようで、
意表をつかれる。

〈冴返る子供の居ない子供部屋〉の句には胸を打たれる。子供部屋の景は極めて簡略であるが、子供の居ない事情となるとさまざまだから、句に広がりがあるわけだが、最後は「冴返る」の季語の方向へと行き着くことになる。

〈開帳や人恋しさは仏にも〉の句には、さもあらなんと納得させられるものがある。仏の本質はそうかもしれない。

〈三面鏡うしろの春をななめにす〉の句では「うしろの春をななめにす」の描写が面白い。

どの句にも難解な用語は使われておらず、景は簡明。それでいて、全てに作者ならではの視点があり、「もの、こと」の本質に迫るものがある。「俳句は精神の風景、存在の詩」とはこういうことだと思う。

顔見ればもう赦してる 露の臺 山根 征子

今度会ったら容赦しないと思っていたのに、顔を見た途端にその気がなくなつたという。どんな間柄かは知らないが、私の場合、孫のことなら大抵のことはその場で許してしまいたい。

〈天のあり受くる地のあり春の雪〉：大地が春の雪を暖かく受け入れている景。雪は空から地上に降って当たり前であるが、天と地を「降らすものと、受けとる場」というふうには認識したところがユニークである。

〈マフラーの黒地一面されかうべ〉：最近、髑髏の模様をよくみかける。こうなると髑髏も案外かわいい。

〈春霰に詩をひそませり竹生島〉：場所が竹生島だけに、春霰に詩情を感じる作者の気持がよくわかる。

風花の地に着くきはの速さかな 十川たかし
静かに舞い降りてきた風花が地に着地する瞬間をとらえた一句。宙を舞っている時と、着地の瞬間の対比が鮮やか。

〈切干の乾くよるひる母の郷〉からは母の郷のぬくもりがよく伝わってくる。

〈末黒野やはなればなれの水光る〉は雨後の末黒野の景が浮かび上がる。

盃 と 唇 ほ どの 間 に 春 柳川 晋
花を愛でて盃を酌み交わす。その盃が唇にふれる一瞬の間に春の気配を感じるといふ。うらやましい感性だ。

〈千年の墓八を出て摩天楼〉であるが、墓が穴を出たら、そこにはビルが建っていたという。千年も生きながらえているような墓であっても、ビルはたしかに摩天楼。

春愁やをんなは泣きしあと笑ふ 近藤 公子

今泣いたと思つたらもう笑っている。女は強いということか。「もの、ことの本質」といふが、掲句はまさに女の本質に迫っているように。(以下略)